

Kappo 東北のメディアに

「大人のためのプレミアムマガジン」として、地域の厳選した話題を上質な紙面で伝えてきた隔月刊誌「Kappo仙台闊歩」(プレスアート)が、創刊20周年を迎えた。4代目の小林薫編集長(34)に節目の記念号をまとめた手応えと展望を聞いた。

—発売中の11月号は周年記念第2弾。建築家や農業者、居酒屋店主、アーティスト、まちづくり合同会社代表ら24人のインタビューを載せました。どんな観点での人選ですか。

「『イノベーションを起す宮城の新しいチカラ』と題して、地域を盛り上げようと新しいことに取り組んでいる人を選びました。意外と30代の若い方が多く、盛り上げ方の多様さも目に見えて分かりました。(仙台市出身の芥川賞作家)石沢麻依さんのように世界に向けて発信している方も取材できました」

—記念第1弾だった9月号は「東北の名店」特集で31のフレンチ、イタリアン、日本料理の店を紹介しました。反響は。

「頑張った企画です。掲載店から『仙台からの予約が増えた』『転勤した客が電話をくれた』といったうれしい報告が聞けました。読者からは『初めて知る店ばかりだった』とも。取材の後も次から次へという店が見つかり、2回目も企画するつもりです」

—高級店や宿のイメージが強い雑誌ですが、この数年を振り返れば伊達政宗、東北ワイン、横町、発酵、世界遺産と特集内容は多彩です。創刊以来、大事

ローカル感深化 発信は世界へ



「地域の情報が充実した地方誌です」と語る小林編集長

—してきたことは何ですか。

(生活文化部・阿曾恵)

「知的好奇心を一番に考えています。グルメ、旅、歴史、何であれ、より深く楽しむための知識を届けたい。ローカル感以前より強くなりました。宮城県内の全市町村を訪ねる『新・宮城風土記』『建築さんぽ』などの連載があります。前から『宮城って何もないよね』という人や、進学・就職で県外に出て戻らない人が多いのを何でだろうと疑問に感じていました。街の魅力を知らないからかもしれない。もっとローカルに目を向けてほしいと意識して編集しています」

—ネット上には無数の無料情報

報があふれています。

「有料誌なので信用が第一。20年続いている媒体だけに、取材を申し込む際に『Kappoさんだったら』と喜んで受けてもらえることがある。テーマ設定と取材対象の選び方はとても慎重です。創刊から関わる執筆陣や撮影陣が多いのも、築き上げたクオリティーがぶれない理由でしょう」

—今後の抱負を。

「もともと宮城中心でしたが、新しく『Kappoは東北へ』というテーマを掲げました。宮城以外の東北の方たちにこちらの情報を届け、宮城の方たちには東北で今何が起きているかを伝えたい。東北を知り、東北を誇りに思ってもらえるようなメディアを目指します。ゆくゆくは世界に広めたい。ウェブなら東京を介さず直接世界にアプローチできる。そのための戦略を話し合っています」